

## 生きている化石

### 1. オオゴキブリ

ゴキブリは嫌われ者ですが、約3億年前の古生代石炭紀に栄えた現在の多くの昆虫類の祖先にあたる原始的な形態を維持している昆虫です。家屋に住み着くようになったクロゴキブリやチャバネゴキブリなど6種以外は森林の住人です。

オオゴキブリは、朽ち木の中に棲み、朽ち木を餌とし、枯死木の後始末をしてくれる有益な虫です。熱帯が分布の中心であるゴキブリですから、打吹山のような照葉樹林の温度変化の少ない朽ち木の中が、冬の寒さに耐える絶好の場所なのです。鳥取市の白兔神社の社叢にもたくさんいます。よく腐ってふかふかになった倒木の樹皮を剥いたり、材を崩してみましょ。当たれば幼虫から成虫まで出てきます。成虫は体長4cmもあり、翅があるのでわかりますが、翅がない幼虫は様々な成長段階のものがいます。冬の低温を乗り切ることのできる卵や蛹という特定の段階まで成長する必要がないため、繁殖期が決まっていなくて年中産卵が行われるのが南方系の昆虫の特徴です。

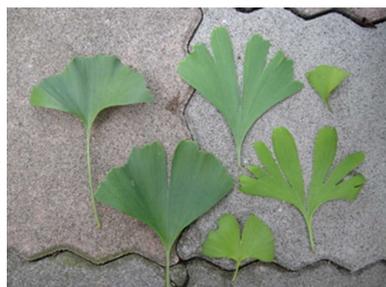
このオオゴキブリはおとなしく、家庭内のゴキブリとちがって朽ち木内だけで生活するため清潔です。触ってみましょ。堅い丈夫な体、鋭い脚のトゲを体感できます。



オオゴキブリ

### 2. イチョウ

打吹山にもイチョウが植栽されています。野生は不明で、かつて中国に残っていたものが栽培されて世界に広がったといわれています。恐竜の時代に繁栄した植物が人手によりかろうじて生存しているといえます。寿命は長いのですが、繁殖の方法が効率的ではなく新しい植物群に負けたのです。遊歩道の途中の木からは大量の銀杏が落ち、樹下一面に数百本の幼木があります。どれだけ生き残れるのでしょうか。



イチョウの葉形の変異



イチョウの葉脈



ゼンマイの葉脈

胞子で殖えるシダよりも、花と種子で繁殖できるようになったイチョウは、より乾燥に耐え巨大化しましたが、シダの特徴をたくさん残しています。葉の形をみると切れ込みの多いものから無いものまであります。よく切れ込んでいるものは、小葉がたくさん集まっているシダの葉の特徴です。葉脈を見ても、網目状ではなくシダと同じ二叉に分れていくタイプです。



イチョウの雌花



イチョウの雄花

雌雄異株で花卉のない雌花の小孔の奥にある卵細胞に花粉を風によって届けるため、雄木は雄花に大量の花粉をつけます。これも効率の悪い方法です。